

先生の愛称を持つ 元大統領ニエレレの死を悼む

吉田昌夫

1 ニエレレの死を迎えて

タンザニアの初代大統領ジュリアス・カンバラ
グ・ニエレレは、1999年10月14日、ロンドンの病
院で死去した。77歳であった。彼の病気が重い
ということは、タンザニアでも直前までほとんど知
られていなかったようである。彼自身どれだけ病
状を知っていたのかも判らない、というのは、つ
い最近まで、ブルンジの和平問題の仲介者として、
忙しく動いていたのである。

ニエレレは、哲学者であり政治家であった。彼
は「ウジャマー」と呼ばれる思想の形成者として
知られ、またそれを大統領としての立場で実行に
移した歴史的に重要な人物であった。政策として
のウジャマーは多くの批判にさらされているが、
彼の思想は、現在でも規範としての意味を失わず、
彼の生きた時代の中での政治活動上の智慧をそこ
からくみ取ることができる。

2 ニエレレが大統領となるまで

ニエレレは、タンガニーカ西部の小村ブチアマ

で、ザナキと呼ばれる小部族の首長の息子として
1922年に生まれた。43～45年、第2次世界大戦中
にウガンダのマケレレ大学（当時は高等専門学校）
に学び、教育学の免状を得た。卒業後タンガニー
カ（当時はイギリスが国連の信託統治領として支配
していた）に戻り、カトリックのミッション系高
校で教えた後、49年イギリスに留学、エジンバラ
大学より文学修士号を得て、52年に帰国した。

1953年、ダルエスサラーム近くの高校で教えな
がら、タンガニーカ・アフリカ人同盟（TAA）
という政治団体に入り活動を始めた。この時イギ
リス植民地政府に、政治活動をやんなら高校教師
をやめろ、といわれ、教師をやめて政治活動に専
念するようになったのは有名な話である。翌54年
7月、最初の政党タンガニーカ・アフリカ人民族
同盟（TANU）の創立メンバーの一人となり、そ
の党首に就任した。その後活発に民族主義運動を
推進し、TANUを強力な全国組織に育て上げ、
61年のタンガニーカ独立時は首相であった。翌年
大統領制がしかれると、初代大統領になり、64年
ザンジバルとの合邦をまとめ、タンザニア連合共
和国を成立させた。

3 ウジャマー政策の顛末

1967年2月にTANUの中央執行委員会は、タンザニアの経済自立をめざして社会主義社会を建設するというアルーシャ宣言を採択した。この宣言は、ニエレレ大統領の起草になるものといわれ、62年に彼が思想として発表したものを現実の政策にあてはめたものといってよい。ウジャマーとは国語のスワヒリ語で「家族」を意味し、ニエレレがアフリカ独特の社会主義の理念を指す言葉として使ったものである。一党制をとっていたタンザニアでは、アルーシャ宣言がそのまま政府の政策の基本となった。

このウジャマー社会主義にもとづき、政府はただちに銀行、保険業、貿易商社、製粉業、サイザル麻プランテーションなど、外国企業におさえられていた基幹企業の国有化を断行した。ついで同年9月には、農村開発を進めるため、ウジャマー村政策が打ち出された。具体的には、散村から集村へと農家の移住を促進し、そこへ井戸、小学校、医療施設などを政府が建設するというものであった。また村有の共同農場設立を推進したが、これはうまく機能せず、住民の消極的抵抗にあい、結局1983年に新農業政策が出されて、家族畑で生産性を高める政策に切り替えられた。国有化された企業は生産性が低く、政府財政に貢献するどころか、赤字続きで国庫からの資金流失の元凶となってしまう。国民がみなニエレレのような清廉潔白で、無私の働きをする人間だったら、ウジャマーもうまくいったかもしれないが、そうでないのを前提にしなかったのがニエレレの失敗だった、というタンザニア人も多い。

4 ニエレレの願い、初等教育の充実

ニエレレは国民からムワリム（先生）の愛称で呼ばれていたが、これは規範を示して行くべき道を教えようとする彼のリーダーシップのやり方からつけられたものと思われる。同時に彼ほど教育の充実を国の政策の根本にすえたアフリカの指導者はいなかったという点から、彼は本当に先生らしい人であったということができよう。

教育者としてのニエレレの方針は、初等教育を植民地的な性格のものから、農業技術などを重視したタンザニアの事情にあった授業を中心にすえたものに変え、学校教育を住民のすべての者が受けることができる権利として定着させることであった。この方針により、1974年に始まった初等教育の義務化（初等教育の無償化はすでに始まっていた）や成人教育の普及などで、国民の識字率は急速に高まり、93年の時点で成人識字率70%となり、1人当たり年間国民所得が120ドルほどの貧しい国で、アフリカ有数の高い成人識字率を誇るまでになった。最近はこの数字が教育の有料化などの影響で少し下がってきているとはいえ、ニエレレは基礎的教育水準の高度化には成功したといえるだろう。また飢饉にしばしば襲われたとはいえ、ほとんど餓死者を出さなかったこと、政治的紛争が暴力を伴わなかったことなど、政治的平和が基本的にはタンザニアの特徴であったということから、ニエレレが敷いた路線が正しかったといってもよいであろう。

ニエレレが果たした国際政治上の役割についてはのちに述べるが、国内政治の面では、1980年代中ごろにはウジャマー方式の失敗が明らかになり、85年にニエレレは経済不振の責任を取って、大統領の座から自ら下りた。

5 私が見たニエレレ

私は方々でニエレレのことを書いたし、彼が大統領の座にあった時のタンザニアに前後2回、3年2カ月住んでいたのであるが、彼と個人的に接触したことは一度もなかった。

私が最初にニエレレを見たのは、1964年にウガンダのマケレレ大学で卒業式の式典があった時のことである。当時私はアジア経済研究所の海外派遣員としてウガンダに滞在し、マケレレ大学の農学部大学院に籍をおいて、東アフリカ農産物流通問題を学んでいた。マケレレ大学は、ケニアのナイロビ大学、タンザニアのダルエスサラーム大学とともに「東アフリカ大学」を構成しており、この3大学の卒業生は「東アフリカ大学」の卒業証書をもらうようになっていた。またザンビアには当時大学がなかったので、ザンビア人の学生もかなりの数がマケレレに来ていた。

この年の東アフリカ大学卒業式は、空前絶後の豪華版であった。出席者に4人の大統領と1人の首相、すなわち東アフリカ大学学長（Chancellor）のニエレレの他に、ケニアのケニヤッタ大統領、ウガンダのムテサ大統領とオボテ首相、ザンビアのカウンダ大統領がいて、ガウンを着た教授連の列の後ろに続いて式場に入場した。卒業生たちは一人一人ニエレレから卒業証書を受け取った。私はその入場の列のすぐ横でこの入場行進を見ていたのであるが、堂々とした体躯のケニヤッタや背の高いカウンダに比べて、むしろ小柄で、しかしさすがにインテリの風貌のニエレレの姿が印象的であった（写真参照）。

次に私がニエレレを見たのは、タンザニアに国際協力事業団（JICA）の前身の海外技術協力事業団（OTCA）から専門家として派遣された1969



マケレレ大学の卒業式における
ニエレレ（1964年、筆者写す）

年から72年の間のことである。ダルエスサラームに住んでいた私は、自分の自動車で町から郊外の自宅に帰る途中、信号が赤になって止まった。向こう側には対向車が来て、やはり信号で止まったが、なんとその対向車の中にはニエレレ大統領が座っているではないか。そこには付添のオートバイも何もいなかったのである。

他の国であれば、大統領が自動車で外出する時には、すくなくとも2台の白バイがつき、けたたましくサイレンを鳴らしながら、信号など無視してつつ走るのが常である。それがニエレレの場合は赤信号でちゃんと止まっていた。この何気なさ、規則を守る謙虚さ。私はニエレレの真骨頂を感じがしたのを、いまでもよく覚えている。

6 パンアフリカニストとしてのニエレレ

国際政治に関していえば、ニエレレはエンクルマに並ぶパンアフリカニストであったと思う。タンガニーカの独立の日付けを決めるイギリスとの交渉の時、東アフリカの他の植民地、ウガンダ、ザンジバル、そして特にケニアが独立するまで自分のところは延期し、東アフリカを一体として連邦を組んで独立することを主張したのは、有名な話である。エンクルマの主張は全アフリカの即時合邦であったが、ニエレレは段階的な合邦を積み重ねていくことを主張し、より現実を見つめたやり方をとっていた。東アフリカ連邦が実現できなかった時、これに近いものとして実現したのが1964年のタンガニーカとザンジバルの合邦であり、また67年の、タンザニア、ケニア、ウガンダ3国による「東アフリカ共同体」であった。

それだけに1977年のウガンダのアミン大統領による共同体予算への振込遅延や、ケニアの一方的な東アフリカ航空公社の解体措置には、ニエレレは無念の感を強く持ったに違いない。大統領を退いてからでも、ザンジバルと本土部との再分離には強く反対を表明してきたことは、この点からも理解できるし、最近の「東アフリカ共同体」の新しい形での復活を大いに歓迎しているのも理解できる。

しかしニエレレのパンアフリカニストとしての最大の貢献は、なんといっても南部アフリカの解放闘争を全力を尽くして支援したことであろう。特にジンバブエの独立闘争においては、同じ英連邦の立場から、イギリスにたいしてローデシア白人政権の非合法性を説きつづけ、フロントライン諸国をまとめ上げ、1980年にジンバブエ独立に

たるまで、調停役として活躍した。また最近知ったことであるが、60年に南アフリカでシャープビル事件がおこり、ANC副総裁のオリバー・タンボの一行がタンガニーカを通して亡命をはかった時、まだ植民地であったタンガニーカでニエレレが当時の英総督のリチャード・ターンブルと交渉し、ANCの人たちが南アフリカに送還されないように約束を取りつけたそうである。これは、97年10月16日にニエレレが南アフリカ議会で演説した際に、議長がニエレレを紹介した言葉にあったのであるが、これがその後タンザニアが南アフリカの反アパルトヘイト闘争を支援した数々の行動の第一歩であったということである。

大統領を退いてからのニエレレは、南南協力の組織の構築に力を注ぎ、1987年から90年まで、スイスのジュネーブに本部があった「南委員会」(South Commission)の議長の職にあり、その後継団体である「南センター」(South Centre)の議長をもつとめた。こうして人生の最後まで、ニエレレは、アフリカの自立と尊厳の回復のため、そして南北問題の中で「南」の立場を強めるため、活動し続けたのである。

〔参考文献〕

- J. K. Nyerere, *Ujamaa: Essays on Socialism*, Dar es Salaam, OUP, 1968.
J. K. Nyerere, *Africa Today and Tomorrow*, Dar es Salaam, The Mwalimu Nyerere Foundation, n.d.
W. E. Smith, *Nyerere of Tanzania*, Nairobi, Transafrica Publishers, 1974.
吉田昌夫「ニエレレ大統領とタンザニア外交の展開」(林 晃史編『フロントライン諸国と南部アフリカ解放』アジア経済研究所 1984年)。

(よしだ・まさお/中部大学国際関係学部)